

## カラムジンにおける強調の大文字の使用について

—パソコンによる文字列検索を利用して—

浦 井 康 男

### §1 ロシア文字の一バイト処理

一バイト系の外字（いわゆる半角外字）作成ユーティリティを使った、翻字によらないロシア文字の一バイト処理については、既に1988年にロシア文学会中部支部で発表したもので、詳細はそちらを参照していただくことにして、<sup>(1)</sup>ここでは要点だけを述べたい。

外字作成はワープロなどでなじみのものだが、二バイト系と一バイト系では事情の異なるところがある。二バイト系では外字用の JIS コードがあらかじめ準備されており、そのコードで作図し外字フォントと共に動かす限りでは、他の文字と紛れることはなく、画面と印字にも問題は起こらない。しかし一バイト系のコードは、255ケの組み合わせしかなく、しかもそれらは全て割当て済みとなっている。

従って一バイトで外字を作る場合には、既にある文字のコードを借りて、その上でロシア文字を作図しなければならない。当研究では、これまで利用されることの少なかったカナ文字のコードを利用し、キリル文字のキーボードの配置に従って、ロシア文字を割り付けた。そうすると電算機自身は一バイトのカナ文字コードを扱い、ファイルの入出力や文字列処理は全く意味のないカナ文字列になるが、画面にはロシア文字によるテキストが現れ、またコード変換の手続きをすればプリンターでロシア文字を打ち出すこともできる。

この一バイト処理のシステムを使い、カラムジンの「ロシア人旅行者の手紙」<sup>(2)</sup>の第一部と第二部を光学的自動読取り(OCR)でデータ化し(約170ページ、500Kバイト)、現在それに色々な文字列処理を加える実験をしているが、今回データチェックを兼ねてこの部分での分析を試みた。データを作品の前半(全四部のうちの前二部)に限ったのは、データの作成とそのチェックが時間のかかる作業であることが第一の理由だが、それ以外にも以前この作品を分析した時に得た体験に基づいている。

それはロシアを出国してドイツからスイスに到るこの部分は、フランス革命

中のパリでの見聞を綴った第三部やイギリスに渡った時の第四部と、文体的に大きく異なっているからである。特に第四部の透明な文体に対して、第一・二部ではカラムジンの様々な言語的な実験が各所に見られ、文体的にはむしろ混沌としていると言ってよいかもしれない。またここは380ページに及ぶこの作品の書き出しの部分であり、彼の目指す文章語もまだ模索の段階で様々な言語的な揺れがあり、それがかえって分析には好都合と思われたからでもある。今回コンピューターを使わなければ出来ない研究テーマとして、この作品における普通名詞の大文字化の現象（いわゆる強調の大文字）を分析してみた。

## §2 カラムジンにおける大文字の使用

すこし以前まで一番信頼できると考えられていた1964年版のカラムジン二巻選集は、<sup>(3)</sup> 現在の文章語規範に合わせて相当量の書き換えが行われ、当時の文章語の様子がかなり歪められていることが、1984年に *Литературные памятники* 版が出たことで分かった。カラムジンによって何度も推敲されたこの作品に対して、テキスト校正と各版におけるヴァリエーションが詳しく示されたこの版は、若干の語尾変化や正書法での修正と、一部のミスプリントを除けば、当時のテキストの様相をほぼ再現していると言ってよいであろう。

そしてそこにおいては、地名、人名などの固有名詞の語頭で使われる大文字以外に、今日では見ることのできない、普通名詞での大文字の使用が相当数見られ、とまどう程である。これらの大文字について Грот は次の様に言っている。<sup>(4)</sup>

Было время, когда у нас всякое иностранное существительное имя отличали на письме большою буквой. Карамзин писал: Автор, Литература. Так же писались, еще долее, имена званий, должностей, учреждений, наук, титулы, независимо от происхождения слов, напр. Генерал, Профессор, Председатель, Департамент, Землеописание. Но вскоре после Карамзина старая привычка стала изменяться.

本研究の範囲でも例えば、professor, студент, поэт 等は常に大文字で現れるが、учитель は常に小文字で、また певец や актер は両方で現れている。また同じ благодарю судьбу の文脈でも、судьбу は大文字にも小文字にもなっている。この研究では大文字の機能についての一般的な理論や、<sup>(5)</sup> そ

の使い方の詳細な規則といった問題には直接触れず、カラムジンにおける特異な大文字の使用とその揺れの現象に焦点を当てて、分析することにしよう。

なおこの研究が、コンピューターを使わなければ出来ない理由は次のようである。カラムジンが大文字で使った語彙の用例を集めるだけならば、手作業のカード取りでも十分に対応できるが、揺れのチェックのため一度でも大文字で使われた語が、逆に小文字でも使われていないかどうかを全テキスト中でチェックすることは、もし調べるのが студент の一語であったとしても、非常に面倒な作業である。だがここで対象となる単語は профессор, студент, поэт を始めとして, певец, актер, судьба 等の250語を下らないので、これらを全て人間の目で正確にチェックすることは不可能に近い。しかしコンピューターは対象の数量的な処理と共に、コンコードダンスに見られるような網羅的な検索も得意とするところであり、上記の作業も部分文字列の検索の手法を使えば、<sup>(6)</sup> 3時間ほどでいとも簡単になされてしまうのである。

こうして集めたデータを分析した結果、この作品の前半の部分に限って言えば、もちろん一部の揺れは認められるものの、カラムジンの大文字の使用は、実に細かい神経が行き届いたシステムをなしていることが明らかになった。前述の発言を見る限り Грот も、このシステムを見抜けなかったと思われる。以下それを順次見て行くと、出現例はカテゴリー的に大きく三つのグループに分れる。

### § 3 一般的な世界

これは階位称号、神、王侯貴族等を示す普通名詞の場合で、以下の§ 4, § 5 に比べると義務的な用法に近いが、個別のケースで大小文字の両方が使われている場合を調べてみると、それらの使い分けには意義の分化を担わせた細かい配慮が見られることが多い。

以下に具体的な単語リストを示すが、リストの中では大文字だけの使用の語も全て小文字で示した。なお単語の後の (/) の中の数字は前が大文字の場合、後が小文字の場合の出現回数を示し、意義の分化のあるものも同じ形式でそれを示した。一方 / の無い ( ) は、特にことわりが無ければ大文字だけの出現回数を示している。また綴りはカラムジンの形に従っている。

貴族 (称号, 人物)

барон (23), князь (7), княгиня (2), курфюрст (4), маркграф (3),

маркиз (9), гофмейстер (1)

кавалер (4/2) : (騎士／貴婦人に付き添う男)

дворянин (3/4) には意義の分化は見られなかった。

聖職者 (称号, 人物), 教派

аббат (2), архидиако́н (3), архиеписко́п (1), духо́вный (1), духо́венство (2), еписко́п (2), кардина́л (1), миссионе́р (1), па́па (6), па́стор (4), пре́лат (2), свяще́нник (11), иезуи́т (8), като́лик (5), о́рден (5), протеста́нт (3)

свято́й (3/2) : (聖人／形容詞で)

пропове́дник (9/2) には意義の分化は見られなかった。

一方以下のものは小文字でしか使われていない。

мона́х (6), монахи́ня (3), це́рковник (3), муче́ник (1), стра́далец (2), бра́тия (2)

軍関係 (称号, 人物)

а́дьюта́нт (1), ва́хми́стр (1), ге́нерал (5), ка́питан (30), ка́прал (1), ма́иор (5), ма́ршал (5), офи́цер (47), подпо́ручик (2), по́ручик (35), по́ручица (1), пра́порщик (1), ри́тмейсте́р (1), се́ржант (2), шта́б — офи́цер (1)

かなり頻度の高い語が多いが、これらには一貫して大文字が使われている。ただテキスト35ページ28行（以下 p. 35-28 と略す）の полково́дец には小文字が使われていて、この用法からの逸脱と思われる。一方兵士・部隊などを示す語には全て小文字が使われている。

行政 (称号, 人物, 機関)

би́ргермейсте́р (2), бу́ргми́стр (4), губе́рнато́р (1), ка́нцле́р (1), ко́мми́сар (2), ко́нсул (1), ла́ндфо́хт (1), по́сол (1), по́чтмейсте́р (13), по́чтмейсте́рша (1), ми́нисте́р (4), се́крета́рь (8), се́нато́р (4), си́ндик (1), со́ветник (2), по́лицейско́й (1), ши́рмейсте́р (6), ша́фне́р (6), адми́ралтейство (1), бла́гочи́ние (1), по́сольство (3), се́йм (1), се́нат (2)

なお以下には一例小文字があった：пра́вительство (4/1), респу́блика (12/1)

王, 皇帝 (称号, 人物)

император (12), императрица (3) король (38), королева (4), принц (10), принцесса (1), царевна (1)

государь (4/32) : (国王/государь мой の呼びかけの形)

царь (3/3) では大文字は「皇帝」, 小文字は以下の例のように比喩的な場合に使われている。

благословляю царя вод Германских (p. 90-37) (ライン川のこと)

был доволен как царь (p. 91-18)

神, 天使等

直接これらを示す語

боже (4), божество (3), господь (2), ангел (3), апостол (1), демон (1), сатана (1), богоматерь (1)

бог (26/3) : 小文字で使われた以下の бог はキリスト教の神ではない  
из творцев Греческих, певца богов и героев (p. 106-14)

бог лесов (p. 115-01)

бог искусный в песнопеньи (p. 130-18)

これに関連してキリスト教には女神はいないので, богиня (0/3) は小文字のみ。

神は大文字使用の一番強力なカテゴリーで, 間接的にこれを示すものならば, 普通名詞はもちろん指示代名詞, 人称代名詞, 所有代名詞, 関係代名詞にまで大文字が使われる。p. 133-39 以下はその典型的な例である。

всевышний (3), искупитель (1), спаситель (4), провидение (3/1)

Я преклонил колена, устремил взор свой на небо, и принес жертву сердечного моления — Тому, Кто в сих гранитах и снегах напечатлел столь явственно Свое всемогущество, Свое величие, Свою вечность! ... (p. 133-39 以下)

また以下の語では大小文字の使い分けが見られる。

творец (2/3) : (創造主/作家)

младенец (3/4) :

Мария со Младенцем (p. 53-06) (幼子イエス)

мать с младенцем (p. 144-18) (難産で共に亡くなった母子)

небо (5/32) : 大文字は動詞 молить, благодарить, благословить と共

に使われた時で、「神」に近いニュアンス。小文字は небо было ясно のような文で、「空，天候」の意味。

судьба (8/9) : 始めは一例を除いて小文字だが，テキスト33ページ以降では擬人化された場合は大文字，普通の意味では小文字にする使い分けが定着する。<sup>(7)</sup>

その他

господин (47/17) :

データのにはかなり散らばっているように見えるが，敬称(Господин Блум, Господин Доктор)では大文字，「旦那，主人」の意味の名詞では(дочь госпоина его)，小文字の用法が一貫して守られている。この用法からのずれは，各々一例ずつ(p. 22-11, p. 30-33)しか認められなかった。

госпожа (7/2) : 上記と同じパターン。ずれは一例(p. 105-26)。

мадам (5/0) : 大文字だけ。

дама (5/11) : 同じ様な文脈で大小文字の場合があり，扱いは一定していない。

#### § 4 学問の世界

ここでは大文字の使用が一貫している。どのような範囲のものにまでそれが及ぶかを，単語リストをあげて示すことにする。

学者の称号，人物

доктор (25/1), профессор (24), студент (22), кандидат (1), магистер (22), ректор (1)

ученый (3/20) : (学者／形容詞で)

以下は小文字のみ учитель (6), учительница (1), ученик (6), ученица (1)

学問の名称及び学者，施設

медик (1), медицина (3), метафизик (3), метафизика (4), политик (1), политика (1), психолог (1), психология (1), философ (26), философия (10), аптекарь (1), аптека (1)

астроном (2), педагог (2), натуралист (4), моралист (1), математик (1),

филолог (1), циник (1), систематик (1), скептик (1), антикварий (1), историк (1), архитектор (1)

логика (4), эстетика (2), химия (1), теология (1), орнитология (1), механика (1), нумисматограф (1)

университет (9), академия (7)

なお история (4/10) には (歴史/出来事, エピソード) の使い分けがあった。

またこの作品では, スイスの哲学者 Лафатер との交際やカラムジン自身の興味から, しばしば観相学 (физиогномика) の用語が現れる。しかしその扱いを大小文字の観点から見てみると, 書籍のタイトルを示す場合などを除いて, 積極的に大文字を使った所は一ヶ所しかなく (p.107-42), しかもそこでは физиогномика と並んで метопоскопия (額占い), хиромантия (手相占い), подоскопия (足の裏占い) の語にも大文字が使われている。上記の単語リストから分るように, カラムジンは学問の世界に一貫して大文字を使っていることを考えると, 彼にとって観相学は擬学問であり, 一定の距離をおいて接していたと言えよう。

## § 5 芸術の世界

学問の世界では一貫して大文字が使われたが, 芸術の世界では分野ごとに使い方は様々である。

詩人及び文学者：ほとんどが大文字

поэт (19/1), песнопевец (3), песнопевица (1), стихотворец (2), литератор (1), ритор (3)

ただし певец (2/7) は小文字の方が多い。<sup>(8)</sup>

詩, 詩のジャンル及び文学：ほとんどが大文字

поэзия (14), идиллия (4), элегия (1), литература (10), ода (5/1)

поэма (4/5) : 小文字は手紙番号33, 34, 38で現れる。

ただし以下のものは小文字だけ

повесть (2), предание (5), роман (1), сказка (1), басня (2)

著者, 出版界

автор (34/1), писатель (8)

上記二語は安定した大文字使用。以下は揺れているか小文字のみ。

сочинитель (2/5), переводчик (2/4), публика (11/7), журнал (2/6)

издатель (0/1), книгопродавец (0/7), читатель (0/6), типография (0/4)

### 舞台芸術

このテーマはいくつかの手紙で集中的に扱われ、大小文字の使用は一定していない。

театр (13/6), актер (8/4), актриса (2/2), опера (6/3), трагедия (4/3), комедия (4/4), комедиант (3/1), драма (4/3)

これらの使用に対しての統一的なルールは発見できなかった。

### 他の芸術

基本的に小文字が使われているが、これはこの領域に対する価値観がカラムジンの時代と現代で大きく違うことによると思われる。つまり彫刻、絵画等は当時は職人による美術工芸品に過ぎず、独立した芸術とは見なされていなかった。ちなみに彫刻が芸術と見なされるようになったのはロダン以降と言われている。

художник (3/11) : 3回の大文字は p. 144 でのみ。カラムジンはこの語を「彫刻家」の意義で使うことが多い。

искусство (3/27) :

英語の art の原義と同じで、彼はこの語を「技術、腕前」の意味で多く使っている。なお大文字は Изящныя Искусства の形で使われている。

以下はみな小文字だけのもの。

живопись (3), живописец (9), ваятель (1), художество (2), музыка (5), музыкант (2)

## § 6 カラムジンの大文字使用

Грот はカラムジンの大文字使用を、外来語に対して、又は起源に関係なく称号、地位、学問等を示す語に対してなされていると述べているが、この説明では § 5 の芸術の世界で見られた、あの複雑な使われ方は説明できまい。例えば автор が大文字なのを外来語のためとするならば、писатель も全て大文字

になっているのを何と説明しよう。また театр は外来語であっても、大文字と小文字の両方が使われている。

これに対して文学記念碑版での Лотман と Успенский の言及は注目に値する。<sup>(9)</sup>

Анализ напряженной работы Карамзина над различными редакциями текста позволяет утверждать, что никогда решение этого вопроса (употребление заглавных букв のこと) не выносилось автоматически и безразлично к содержанию, а всегда преследовало идейно-художественную цель, выражало некоторую позицию автора.

上記のことをかいつまんで言えば、カラムジンの大文字使用は、彼の価値判断や共感と結びついていることになろう。この立場に立って §5 の芸術の世界での大小文字の使い方を見てみると、大文字は詩文学の領域とその作家に集中していることがわかる。

これとカラムジンがクロプシュトックに心酔し、作品の各所でこの詩人に言及し、また彼のゆかりの地を訪ね歩いていること等を考え合わせると、ここでのカラムジンの大文字使用は、芸術の中で詩文学を最高のものと考え、それに志を立てていることの反映と解釈されよう。

これに対して §3 の一般的な世界では状況は大きく異なっている。実際ここにおける称号や地位を示す名詞の大文字使用に、彼の共感を読みとることはいささか無理であり、むしろここでは大文字使用の正書法規則の設定と、それによる大小文字の使い分けを実践していよう。

Грот は §2 で示したカラムジンの大文字使用についての言及の後半で、<sup>(10)</sup> 彼自身の大文字使用の規則を提案しているが、そこでのカテゴリーは本論 §3 のものにかなり近い（大文字使用は、神、ロシアの王朝名、称号、役職、地名、民族、宗教、国家機関、教育施設等）。

§4 の学問の世界での大文字使用については、それが一貫してなされている点からみれば §3 の義務的な用法に近いが、一方 учитель, ученик は小文字だが、профессор, студент が大文字であることや、彼が学問を好み、一時はドイツ留学も夢みたことを考え合わせると、§5 と同様に彼の共感と結びついていると言えるかもしれない。

以上をまとめると、カラムジンの大文字使用には正書法による義務的使用と、彼の価値判断による任意の使用の二種類があるが、両者は文字面では区別できないため、テキスト中では両者が渾然一体となっていて、そのままでは彼の大文字使用の意図がつかめないことの方が多いと言えよう。これがカラムジンの大文字使用の真の姿ではなかろうか。

## §7 結語

§4, §5 で示したデータで、使用規準も明確で揺れの生じる可能性が少ないものの中で、1回だけ小文字が使われている場合がいくつかある。それらは автор (34/1), (小文字は p.168-44), доктор (25/1), (小文字は p.66-19) 等であるが、当初これはカラムジンの校正もれかと考えていた。

しかし1820年版のカラムジン著作集<sup>(11)</sup>のマイクロフィッシュが入手できたので、それでチェックした所、上記の小文字は大文字で印刷されていた。一方文学記念碑版もこの生前最後の版である1820年版を底本にしている<sup>(12)</sup>ので、これは記念碑版のミスプリントであることが判明した。そこで§3, 4, 5 で扱った全データを再度1820年版と照合してみた所、さらに поэт (p.58-13) と ученые (p.65-27) も大文字であることが分かったが、судьба, театр 等の揺れの複雑なものにはミスプリントは見つからず、この揺れはカラムジン自身のものであることを確認した。従って本論文の§3, 4, 5 で扱ったデータは信頼できるものである。

カラムジンの大文字使用にはこれまで述べたものの他に、ルソーとの関係で作品の後半も扱わなければ結論の出しにくいものがある。それは自然、啓蒙主義、革命関係の語彙であるが、第一、二部で得られたデータを示すと、

натура (35/3), природа (28/1)

以下は小文字だけ

свобода (30), революция (4), просветитель (1), просвещение (7)

このデータからも、ルソーの自然観に傾倒し啓蒙主義に否定的なカラムジンの態度が見てとれるが、これについてはフランス革命中のパリを扱った第三部を考慮して分析した方がよいと思われる。なおこの作品中では натураは「自然の力、造化」、природаは「自然界」の意味で使われており、натураの小文字はいずれも, человеческая натура<sup>(13)</sup>の形で使われていた。

最後にカラムジンの共感や価値判断と結びついた大文字の使用を、どう考えるかという点に触れるならば、当時のロシア文章語はまだ未熟で、個々の作家に大きなフリーハンドの余地が残されていたと考えることもできよう。だが少なくともロモノソフ以来の近代化されたロシア語の蓄積はあり、彼の先人達によって大文字使用の一定のガイドラインは、西欧の諸言語に倣って既に定まっていたと考える方が自然である。

するとカラムジンのこの突出した現象は別の側面から考えねばならない。そこで考えられるのがセンチメンタリズムの「新文体」である。以前の研究でも指摘したように、<sup>(4)</sup> 新文体には「強調のための強調」といった、過度の強調が随所に含まれている。そしてカラムジンが当時の常識を破ってまで、多くの普通名詞を大文字で綴ったのも、実はこのモーメントに由来するのではないだろうか。

このように考えると、これまで誰も言及することはなかったが、カラムジンの価値判断による大文字の使用は、新文体を構成する要素の一員であり、少なくともカラムジンの新文体を特徴づけるものである、と主張することが可能となろう。

注(1) 日本ロシア文学会中部支部会報 No. 22, 「パソコンにおけるロシア文字の入力について」 pp. 1~6, 1989年, 及び福井大学情報処理センターニュース, NETWORK vol. 3, No. 2. 「借家住まいのロシア語」 pp. 172~174, 1989.

(2) Н. М. Карамзин, Письма русского путешественника, Ленинград, 1984, «Литературные памятники».

(3) Н. М. Карамзин, Избранные сочинения в двух томах, М.-Л., 1964, том первый.

(4) Я. К. Грот, Спорные вопросы русского правописания от Петра Великого доныне, изд. 2, СПб., 1873, стр. 358.

(5) 固有名詞の大文字化には非意義化の機能（例えば Кузнецкий Мост は「橋」でない）があると言われているが、普通名詞の大文字化にはこの現象は現れない。Обзор предложений по усовершенствованию русской орфографии (XVIII–XX вв), Москва, 1965, стр. 380.

(6) 当研究は小文字優先のシステムになっている。そのため大文字は@記号と対応の小文字で示すことにし、テキストで文頭の大文字は小文字に直し、文中に現れる大文字について、@と小文字で示すようにした。一方部分文字列の検索では、或る文字列の前後にどんな文字が来てもかまわないので、上記のデータで例えば検索を студент で行い、部分文字列の境界を#で示すと、大文字使用の @#студент# と小文字使用の #студент# が拾い出せるだけでなく、それらの格変化した @#студ-

ент#a や #студент#ом などの形も全て拾い出せることになる。なお検索プログラムは福井大学教育学部の 館清隆助教授の開発したプログラムを利用させてもらった。詳しくは、NETWORK vol. 1, No. 4, 1988, pp. 9~25, 館清隆, 「英語例文検索システムの公開利用に向けて」を参照されたい。またコンピュータによる文字列処理の基礎的概念や方針については、電気通信大学の岡本哲也教授に多くの示唆をいただいた。

- (7) 以下の図で数字はページを、数字の上の\*は благодарю судьбу の構文を、「人」は擬人化された場合を示すことにすると、судьба の大小文字の使われ方は次の様である。

大文字：	* 23	* * 人 人 34, 49, 60, 76,	* 人 * 138, 148, 156
小文字：	* 人 * 人 6, 14, 22, 31, 33	132, 135,	161, 166

- (8) カラムジンはクロプシュトックに対してしばしばこの語を使っているが、この語の本来の意義は「歌い手」であり、поэт ほど明確な概念規定が無いと思われる。
- (9) Литературные памятники 版, стр. 519.
- (10) Я. К. Грот, *op. cit.* стр. 359.
- (11) Н. М. Карамзин, Сочинения, изд. 3-е, М., 1820, т. 2~5.
- (12) Литературные памятники 版, стр. 391.
- (13) 多分これは human nature をロシア語に移したものと考えられ、ここでの nature はカラムジンの натура と概念が違うので小文字になっているのであろう。
- (14) 浦井康男, 「カラムジンにおける形容詞最上級の使用について」, 古代ロシア研究, XVI, pp. 128~129, 1986.

## KARAMZIN'S USE OF EMPHATIC CAPITALS: Utilizing a Personal Computer for Finding Letter Sequences

Yasuo URAI

I managed to succeed in processing single-byte Russian characters without transliteration and in optical character recognition of them. I made a data collection of the first half of "Letters of a Russian Traveler" (the total length of the First and the Second Part is 500 K-bytes) by Karamzin, and analyzed capitalized common nouns, which would be extremely difficult without the help

of a computer.

As a result, Karamzin's use of capital letters is found to cover three major fields, such as General Titles for God, nobles, classes, etc., Arts and Academic. In the first field he suggested and also at the same time practiced his own idea of orthography, and he showed a great deal of care in the way he used capital letters and small letters. In the field of Arts his unique usage of capital letters seems to be deeply involved with his own values and constitutes an element of so-called "new style".